

2020/06/27 Bゼミ

錯乱のニューヨーク

第V章 死シテノチ（ポストモルテム）

担当：水田

マンハッタニズムの完成形

光の都市

- ・マンハッタンがモデル
- ・インフラストラクチャーとしての潜在意識を暴き出す建物と地下の断面図

- ・曲げられたマンハッタン・グリッド
- ・模型でのみ実現可能
- ・完成した過密の文化

マンハッタンそのものが、マンハッタンの理論モデルの不完全な近似的形態である。

遺産

1930年代末、謎めいた遺産となったマンハッタン

実際主義という仮面を被った建築家

⇨マンハッタニズムを成立させる為に、自発的な健忘症に陥ることで繰り返し同一の潜在意識的テーマを蒸し返した。

部族の秘密として本当の意図を守る「保秘の行為」そのものが消し去られてしまう。

本来の意図が消え去ったマンハッタンは、免疫のないまま外来イデオロギーにさらされる。

ウォーレス・ハリソンの両義的な姿勢

「光の都市」と「デモクラシティ」
マンハッタニズムの原則に基づいた完成形の構想
⇔モダン建築への回帰

マンハッタンの最後の可能性を託されたハリソン
マンハッタンから建築の資産を剥ぎ取っていく⇔本質のいくつか
を保護し、その中で可能性のあるものを抽出した。

ウォーレス・ハリソンの両義的な姿勢

Xシティ

ル・コルビュジエの輝く都市の変種

⇔カーブしたスラブ、曲線は光の都市以来のマンハッタンの秘かな象徴

その後、国連ビルやラグァーディア空港にも象徴的な曲線が登場する

〈厳格さと自由の弁証法〉

かつてはマンハッタンの厳格さに屈した自由なフォルム。ハリソンは、グリッドの没人間性に対立させて、人間性を表すしなやかな曲線を自らの象徴として独自に打ち出した。

島

〈リンカーン・センター〉

- ・ロックフェラーセンターの初期の構想
- ・プロジェクトの同時進行という独創性がない
- ・オペラだけ、演劇だけ、フィルハーモニーだけ
マンハッタンの詩的密度の稀薄化

単一敷地で無限に多くの多層的で予測不可能な活動から、予測可能で一義的なものへと後退したマンハッタン。

しかし、リンカーンセンターの土台は「島」であった。

マンハッタン以後

ハリソンはマンハッタニズムを捨て去り、ロックフェラーセンターのX,Y,Zはマンハッタンへの最後の貢献となった。

再びAがくる…？



ニューヨーク博覧会（1964年）
ユニスフェア

ロックフェラーセンターのX,Y,Zによって完成したマンハッタニズムの円環。マンハッタニズムの終わりにより空っぽになった内破された世界を表現。（?）

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_\(1964%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_(1964%E5%B9%B4))

- 「島」
- 第二次世界大戦が建築に及ぼした影響（ハムレット）